

# 陶遊

2004年9月1日発行第469号増刊  
昭和45年7月26日第3種郵便物認可  
盆栽世界9月号増刊

57 <sup>2004</sup> September

あなたもできる陶芸誌

特集

灯り  
で楽しむ

秋の夜長

麵がおいしくなる器

めん鉢をつくらう

はじめてみよう

磁器づくり



# 虚空窯 (穴窯) 焼成報告

■焼成作品は68ペー  
ジを参照してください

報告◆菅原誠



今回で虚空窯での焼成は四回目となります。

三回目の結果は「陶遊」43号に報告しましたが、灯油バーナーを用いて柴をしようとしたことが裏目に出て、うまく焼けた作品が少ないという結果でした。

今回は、前回の反省にたつて、初めから薪を用いて、あせらずじつくりと焼成しようということになりました。

そのための準備が大変です。半年がかりで薪割りをを行い、前回の三倍以上の薪を用意しました。近隣のゴルフ場から松、近くの農家から雑木の切り株をもらって窯の近くに運び込み、チェーンソーで切って、当初は人力で薪割り、後になって薪割り機で薪にする単純な力作業が延々と続いたのです。ご協力いただいた男性陣にお礼申し上げます。

また煙突を12m長くして空気の引きを強くしました。煉瓦では積めない高さなので薄い鉄板を利用しました。

さて、一般に陶芸教室に通う方は女性が多いといわれています。白次陶芸教室でも同じで、女性パワーが炸裂しています。今回はこの女性パワーを利用して焼成することになり、二か月ほど前から編成表を作成して対応しました。



参加者全員で窯出しされる作品を窯詰めの状態を再現しながら並べていく



日程表をみていただくと、連休にもかかわらず多くの女性が参加していることがわかります。

## 焼成開始

4月29日午前8時に火入れを行いました。

この日は朝から女性の生徒さんが五人駆けつけました。男性は先生を除くと一人です。女性はにぎやかです。穴窯焼成のために来てもおしゃべりは続きます。話題は旦那のことから厚生年金問題、はたまたパートの話から食べ物、自身の体脂肪問題からやつと陶芸の話になったと思うと人間の火葬の話と、めまぐるしく変わります。とにかく誰かが何かをしやべり続けているという感じです。

火入れをすると、火はだんだんと大きくなっていきます。それを見て「うわー火を見ると興奮する」と歓声を上げ、精神年齢は女の子、肉体年齢はそれなりのおばさんといった状態です。それでも窯の前に陣取って薪をくべる手は休まません。さすが主婦です。

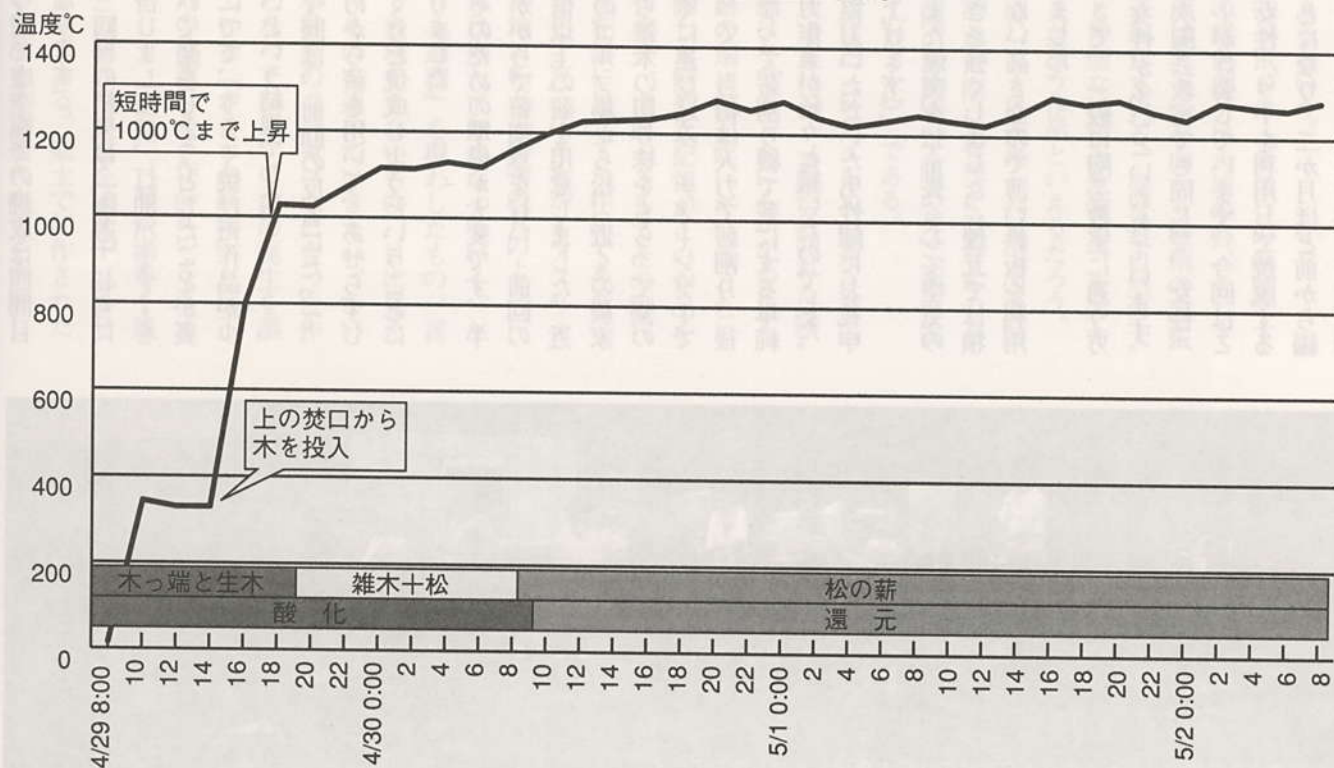
穴窯の灰は後で釉薬にすることができるとい話をすれば「人間を焼いた灰も釉薬になるのかな」「釉薬の月白が牛骨からできているのなら、人間の骨で作ったらもっ

ときれいな釉薬ができるのかな」「先生が死んだら焼いた灰を使って大治郎釉（先生の名前です）を作ったら良い」「それがいい。先生そうしなさい」「火葬場に行つて余った灰を集めたら良い釉薬ができるかも」「今度集めてみようか」と話は果てしなく続きます。もしどこかの火葬場で人目を盗んで遺体の灰を集めている怪しいおばさん達がいたら、それは白井教室木曜日の小堀さんと川渕さんです。みんなで石をぶつけましょう……。

ただどひよつとして釉薬でなく人骨そのもので陶器の観音像などを作りメモリアルボンチャイナとして遺族に渡すなどの商売をやったら感謝もされ、まる儲になるかもしれない。会社を首になつたときは真剣に考えましょう。

冗談はさておき、初めの薪は松ではなく、雑木の生木や木っ端を用いました。木っ端は乾燥していたので温度が上がりますが、雑木は十分に乾燥していない生木そのものなので、燃やしてもなかなか温度が上がリません。350℃あたりを数時間うろうろしていました。しかし煙突を伸ばした効果は現れています。今までは500℃までは空気の引きが弱く、煙が窯の入り口から出てきたのですが、今回は500℃以下でも煙は煙突

平成16年4月穴窯焼成温度記録





のほうに流れていきました。最初は生木を使う必要があったので、温度を上げるために攻め焚きに用いる薪の投入口からも生木を投入したところ温度はすぐに上昇するようになりました。昼からは若い女性もがんばって作業をしてくださいました。渋谷のセンター街あたりで変な化粧をして遊んでいる女性とは格段の差があります。彼女たちの努力もあって、この日の18時ごろには目標の1000℃に達することができました。

夜は白次陶芸教室きつての酒豪二人に花一輪加わって三人で酒盛り兼窯番が行われました。このうちの二人は一昨年の世界貿易センタービルテロが行われた9月11日にアメリカにいました。とくに花一輪の山岡さんはまさにあの時間に飛行機に乗っていました。よく無事に帰って来れたものです。彼女は今年の10月に結婚するので、結婚披露宴で乾杯につかう「ぐい飲み」を目下作成中です。イギリスの陶芸家ルーシー・リーを手本にしたぐい飲みです。披露宴に参加される方は期待してください。この三人の飲みっぷりはみごとなもので、八海山純米吟醸と寒中梅大吟醸の合計2升をほとんど飲みきりました。おかげでほかの飲兵衛たちは美味しい酒が飲めなかった

とかなり怒っていました。こんな状態でですから詳しい状況は分かりません。しかし酒は飲んでもきち

つと責任は果たすという事で、薪にした時期別の差(乾燥度合い)をチェックして差がないことを確認しています。この日も薪は松と雑木の併用でした。この時点ではまだ煙突から火はでていません。ほとんどが酸化焼成と思われます。目標の1100℃には4月29日の真夜中、30日に日付がかわった頃に達成しました。この時点でも松と雑木を混ぜて燃やし続けました。

4月30日の朝になって酒盛りで意識朦朧となっている三人に代わって、新戦力の女性陣が窯番を始めました。このあたりから、熾きの掻き出しと温度の維持に四苦八苦することになります。長ズボン長袖にもかかわらず、手足の皮膚は日焼けしたような痛さです。サウナにずっと入っているような感じで大汗をかいて水分補給が大変でした。女性もよく耐えています。ひよつとして女性には脂肪がある分、男性より暑さは感じないのかもしれないが、私は女になったことがないのでわかりません。今回初めて穴窯焼成に参加した人たちは「穴窯で作った作品は高価であることがよく理解できた。作業がこんなに大変とは思わな

かった」といっていました。何事も経験は大切です。

この日の夜も酒豪が何人かいましたが、旨い日本酒はすでになくなって、ビールと焼酎、そしてワインとなりました。窯の温度が1200℃を超えているのでとにかく熱く、酒を飲んでもすべて汗となって出て行く状態です。女性は石川さんと高橋さんが参加しましたが、高橋さんのご主人が夜半まで付き合っていました。やっぱり不安だったのでしょうか。しかし作業する男性陣をじっくりとみていて、これなら人畜無害の連中であると認識されたのか帰っていかれました。高橋さんは、みんなから助教と呼ばれています。つまり白次陶芸教室のアシスタントなのです。彼女は先生と同じく毎日顔をだしていました。連休中ずっとつき合わされたご主人はなんとかかわいそうですね。助教は旦那を尻に敷いているのかもしれない。

この夜は1240℃→1280℃あたりを維持することができました。煙突を高くしたのはここでも効果的でした。前回の焼成では温度を上げるのにかなり苦労したのですが、今回は薪を投入すれば上がります。5月1日の昼間には努力のかけがあつて1300℃

以上に何回か上がる状況になりました。平均温度も1280℃程度を維持できました。1300℃近くになるとやはりいろいろ工夫が必要になります。対策は以下のとおりです。

●正面の入り口には防風マットを取り付けて、必要以上の空気が入らないようにする。

●薪はできるだけ井形に組むようにする。

●温度が下がれば両側の薪投入口からは細い薪を投入。

●熾きの掻き出しはこまめに少しずつ行う。

とくに、熾きの掻き出しをこまめに行うことが温度維持に極めて重要であることが実感できました。熾きを大量に掻き出すとどうしても温度が下がってしまいます。時間と共に作業者は替わりますが、きつちりと伝達事項を伝えて温度維持を図りました。

5月1日はかなり冷え込みました。そうなると窯の近くにいてもそれほど暑くなく作業は楽になります。前日の作業よりかなり楽になりました。穴窯の焼成は冬が良いというのは体力的な問題もあるのかもしれない。

この日の夜は日本酒がまったくない状態です。これではみんなの不満がつのることはわかっていま



したので、前日に急遽、滋賀県から知る人ぞ知る銘酒「松の司」のあらばしりを取り寄せて持ち込みました。この酒はこぐがあり、いつ飲んでもすこぶるおいしいのです。酒は価格や名前ではないことを示しているような酒です。これでみんなもなんとか窯番を務める気になったと思います。次回の窯番の時は、北大路魯山人が愛した「七本槍」(滋賀県)か、横山大観が愛した「大観」(茨城県)あたりで楽しもうと思っています。同じ酒を飲むにしても我々には文化の香りがすると思いませんか? なに、「単に酒を飲みたいだけだろう」って? ばれましたか。しかし窯から出た熾きを利用した野趣あふれる料理とおいしい酒、それに趣味の陶芸となれば、これぞ人生の楽しみ極まるではありませんか。人生は楽しむことも大切です。

またわき道にそれました。話を本題に戻します。5月1日は風が強く、掻き出した熾きが飛んで火事にならないように常に水をかけて消火するようにしました。何事も安全第一です。

当初の予定では5月2日の夜まで燃やし続ける予定でしたが、今回も薪がなくなってきました。この夜はさすがに白次先生も疲れて自宅で睡眠をとられていました。

実は先生にとってこの日の夜のメーバーが一番信頼に足るメンバーなのです。酒を飲みすぎることはなく、状況判断が的確で手抜きをしないことを作陶の態度から先生は見抜いておられたのです。これも裏返すとおもしろい作品が少なくということになるのでしょうか……。この方々は、期待にたがわず薪が少なくなった時点で先生が来るまで火を保つように調整をして結局5月2日の朝10時まで焚き続けました。

## 窯開き

5月7日は朝から曇って今にも泣き出しそうな空模様でした。しかし気分は最高です。窯開きの時はいつも期待で胸が高鳴ります。今回は策を弄することなく穴窯らしい焼き方をしたので、今まで以上に期待をしました。当日は母の日と重なっていたため、残念ながら参加できなかった人がおられましたが、それでも20人以上が集まりました。

さて作品を取り出していくと、かなりの作品が割れていました。多くは、たたら作りのものですが、壺にもひびが入っています。場所によっては発色が物足りない作品が少なからずありました。前回と



窯出しされた作品を見て思わず顔がほころぶ

異なり、窯全体の温度は十分に上がったはずですが、灰は十分すぎるほど飛んで作品の表面についています。しかし、炎の陰になっていくところが場所によっては期待はずれでした。前回、窯は生き物ということを痛切に感じましたが、今回も同じです。窯は灰かぶりの良い作品を作る窯と発色の良い窯があり、これを両立させることができないといわれていますが、正にそうかもしれない。割れた作品が多かったことについては、350℃あたりから急速に1000℃まで上げることが関係しているかもしれません。前回までは、300℃から1000℃にするのに10時間程度かけていたのですが、今回は煙突を高くしたためか4時間程度で上がっています。

発色については、前回よりは良かったのですが、前々回のPETフィルムを用いた焼成に及びません。たしかに短期間の還元の場合

いはPETフィルム焼成のときは強かったと考えます。しかし、今回はかなりの間、還元されたはずなのでちよつと意外でした。煙突を長くしたため引きがよくなり、思ったより空気(酸素)が入ったのかもしれません。この件については、時間をかけて考察したいと考えています。

今回の作品の中で穴窯らしさを出したのは、森さんの大鉢、小泉さんの花器、小野さんの花器などでした。いずれも入り口近くの作品で、発色も良く、灰が熔けて緑や薄青の色がでたものです。森さんの鉢と小泉さんの花器は、まさしく灰かぶりのところにあった作品です。入り口近くといっても、入り口そのものでなかったのがよかったのではないかと思います。灰の流れが実にみごとな風合いとなっていました。小野さんの作品は2列目で灰かぶりの所ではありませんが、これもすばらしい焼き上がりでした。彼が他の陶芸教室の友人にこの作品の写真を見せたところ「参りました」といわれたそうです。ほとんどの陶芸教室では電気またはガス窯であり、薪で焼成する穴窯の色にはかないません。先生の作品はちょうど入り口にあったのですが、完全に割れていました。割れてさえないけれ



ばすばらしい作品だったのですが、窯のせいにはしないのはさすがが先生です（本心は分かりませんが……）。今回は、通常の焼き締めだけでなく、釉薬をかけた作品も試しに入れました。作品は、すべて窯の3列目か4列目の奥のほうに置き、炎の影響が少ないようにしました。しかし釣窯釉、鉄ビードロ釉、唐津釉、薬白釉、黄瀬戸釉、空色釉をかけた作品は、すべてのものが土灰釉とほとんど変わらないという結果でした（写真参照）。なぜそうなったのかよく分かりません。温度が高すぎたのか、灰が多すぎ

たのか、非常に不思議です。紅志野については、少し色ができましたが、いわゆる紅志野の色ではありません。鈴木さんの花器などがその例です。人によってはほんのりとした風合いでなかなか良いという方がおられますが、当の本人にとっては本意ではないと思います。今回の作品の中でもっとも変わった結果を出したものは、二度焼きした茶入れでした。この茶入れは、もともと信楽のブレンド土（赤と白の混合）を用いて作り、梨灰を霧吹きで掛けて電気窯で焼いたものです。電気窯での発色が悪

かったので再度穴窯で焼き直しを試みました。色は、電気窯で焼いたときとまったく異なる黒色になり、光沢が出てかつラスタースタイルのような不思議な色を出していました（写真参照）。このような色が出たのは、この作品だけです。梨灰は字のごとく梨の木を焼いた灰釉であり、この穴窯で発生する灰とほぼ同じです。それにもかかわらず、なぜ黒く光沢のある表面になったのか分かりません。土の鉄分が大きく関与しているのでしょうか。釉の色は、黒、柿色、茶色が混ざっています。

実は、酒注のひとつも同じく梨灰をかけて電気窯で焼いたものを二度焼きしました。しかし色合いはまったく異なります。こちらのほうは、全体がすこし赤茶色になった状態で、梨灰をかけて二度焼きしたという雰囲気です。茶入れと酒注との差は土がブレンドか古信楽かということ、窯での位置が奥か手前かということです。

『陶遊』の編集者に尋ねたところ「信楽（手前）と備前（奥）を同じ窯で焼いている人から聞いた話では、穴窯の煙突が高かったときは金メタ（備前特有の金属色。ラストー）が出たが、低くするとまったくでなくなったという例がある」ことを教えていただきました。煙

窯開きから3週間ほどたった金曜日に、みんなが集まって歌舞伎座の近くで反省会を開催しました。もちろんお酒入りの反省会です。やはり色合い、割れ、煙突、温度に議論が集中しました。議論が出尽くし、みんな酔いがまわったところで意見を集約した結果は「今回の窯焚きは独身女性をはじめ美しい女性が多く参加したので、お窯がはずかしかったのだろう」ということでした。これだから酒飲み議論は信用できない。



窯出しを無事終えて、全員で乾杯

窯前広場に並べられた作品を見ながら話がはずむ





ぐい飲み 14×14×10  
松本幸四郎 テーマは「山と溪谷」  
でした。ぐい呑みの色は満足です



花器 19×12×19  
横野美佐子  
灰かぶりがすてきです



花器 16×16×10  
庄司妙子 穴窯は初めて。苦勞の  
かいがありました



花器 22×22×37 大和田洋子  
形と灰の流れがバランスよく感激  
です



花器 9×13×20 小泉春江  
思ったより「てかり」がありまし  
たが、それ以外は満足です



壺 22×22×31 長堀良夫  
形と色合いが気に入った作品で  
す。要所にブレンドの土使用



大鉢 35×35×15 森善子  
こげと灰かぶりと色合いがすばらしい作品

壺 23×23×24 白次丈治郎  
温度を上げすぎ。次回は「てり」がでない焼きに挑戦

薪窯焼成は毎回新鮮！

## 第4回虚空窯焼成

※虚空窯に窯詰めされた作品を、焚き口の第1室から第2室・第3室の順に  
紹介します。焼成データと結果報告については77ページを参照ください。  
表示サイズはcm。



花器 29×10×20 石川洋子  
灰かぶりと焼締めがはっきりと分かれてお  
もしろい作品



花器 12×12×24 奥村貴史  
穴窯焼成ならではの焦げも付着し、いい感  
じになりました

## 第1室 焼成作品



花器 9×3×44  
白田奈々枝 渋い色合  
いがすてきな花器



スタンド 11×11×13 細井江実子  
信楽のブレンド土を使用。焼締めとしてよかつ  
た



## 第2室 焼成作品



中皿 25×25×10  
横田三枝子 飽きのこない素朴な感じが好きです



片口 22×22×5 増田久子  
まんべんなく灰が付き、湖のような出来上がりです



中鉢 23×23×9 佐々木美智  
信楽の雰囲気が出せました



黒鉢 25×25×10 近藤生  
ヒビ割れが多数発生。芸術作品？



花器 11×11×24 井上沢奈  
雰囲気が出てき



中深鉢 18×18×15 山田均  
表裏がはっきりしすぎました。男と女の世界



中鉢 24×22×9 桜庭さかえ  
穴窯作品で気に入っています



中鉢 26×26×9 富田久美子  
きれいにできあがり満足です



大鉢 27×27×8 須藤良子  
灰の流れと色合いがよく、いい作品になりました



花器 25×25×12  
梶山富士子 穴窯の良さに惚れ込みました



スタンド 22×22×27  
中山さよ子 穴窯の色はすばらしいと思います



片口 17×13×16  
上野協子  
渋い作品に仕上がりました



花器 23×23×22  
大山和美 灰かぶりが少なく、もう少し色がほしかった



壺 27×27×32 平舘悌三  
穴窯らしい作品になりました



花器 15×15×24  
兵藤三郎 こげと灰かぶりが魅力的です



花器 24×16×28 小野泰一  
たいへん満足した風合い。最近の作陶のうちに最高の出来



花器 15×15×30  
増田千枝子 焼締めの色合いもよく、思い通りの作品です





スタンド 21×21×24  
寺西敬子 森の中のスタンド



取手付大鉢 16×28×26  
村松けい子 ブレンドでこんなに  
黒く焼き上がりました



花器 11×11×28 菅原誠  
穴窯で焼いた信楽の風情は出せた  
が、もう少し発色が欲しかった



スタンド 12×12×14  
湊みのり 和風のふんいき



植木鉢 12×12×16 佐々木幸子  
ちょっとあっさりしていますが、  
よかったと思います



中鉢 25×25×8  
高橋りつ子 底に溜まった灰釉の  
緑色がすてきで気に入っています



土瓶 16×11×23  
秋元静子 端正な形と色合いが  
つりあって満足



片口 16×12×8 伊藤ふみ  
安曇野の「若草物語」でかんぱい



中鉢 19×19×7 小堀礼子  
初めての経験。気に入ってます



片口 19×19×8 吉崎幸孝  
思い通りの色です。早速使いました



大皿 44×37×5 大泉久子  
ヒビが入って、すすが入りすぎてしまいました。  
でもすてき



楕円皿 30×15×5 日下美恵子  
間違って紅志野をかけたのですが、気に入って  
います



皿 34×27×4 川上千恵子  
板皿で割れることなく焼きあがり感激して  
います



平板皿 26×12×4 片野美絵子  
灰釉の溜まりぐあいが良い感じです



中鉢 17×17×6 岩田佳子  
灰の緑色が綺麗ですてき



小皿 17×17×3 大皿 30×26×4  
高橋みどり  
灰かぶりの状態がよく気に入っています



## 第3室 焼成作品



ぐい飲み 7×7×5 石毛健  
友人に上げるぐい飲み多数。喜ばれると思います



小皿 12×12×4 芳賀かおる  
紅志野釉を施釉。きれいに仕上がりました



皿 37×26×5 水口淑江 紅志野釉を施釉。色合いがほんのりしてよかったです



茶碗 13×13×7 山岡千春  
色は良かったが月白が流れてちょっと残念



小壺 10×10×10 鈴木和彦  
紅志野釉を施釉。ほのかな色。もう少し赤くなってもよかった



茶入 6×6×10 菅原誠  
思いもかけない変化。ラスター状の色となり感激

★今回の焼成では窯奥に、鈎窯・鉄ビードロ・唐津・藁白・黄瀬戸・空色の各釉を施したものを入れたが、結果はすべてが土灰釉と変わらない結果になった。その原因は不明で、課題を残した。  
★写真左は、写真左上の梨灰を掛けて電気窯で焼成したものを今回の薪窯で二度焼きした作品で、想像を超えた不思議な発色の作品となった。この原因も不明で薪窯の醍醐味が味わえた焼成であった。



花器 16×16×25 井上靖子  
思ったよりすばらしい色



壺 10×10×23 倉田和幸  
全面灰かぶり。満足しています



花器 21×21×36 吉田和江  
形が崩れず、灰の流れが荒々しくすばらしい作品でした



水指 17×17×20 岩田光治  
ヒビが入りましたが、釉の色合いがシックで満足



花器 20×20×32 藤本みどり  
灰の流れが見事でした



花器 15×15×25 坂本陽子  
とても気に入っています